

通釈『別本八重葎』

— 付・通釈『八重葎』（補遺） —

妹尾好信

【キーワード】 別本八重葎、 中世王朝物語

はじめに

中世王朝物語の一作品である『別本八重葎』の通釈を試みた。同物語は天下の孤本で、宝暦九年（一七五九）二月の富士谷成章の奥書と、寛政七年（一七九五）五月の成章の子成学の書写奥書を持つ本が唯一の伝本である。吉田幸一氏の所蔵であったが、現在は神野藤昭夫氏（紫草文庫）の所蔵になる。神野藤昭氏のご厚意により写真複写の提供を受け、同本を底本として、濁点・句読点・かぎ括弧等を付けるなどの処理を施して本文を作成した。便宜上、段落に区切って通し番号と短い見出しを付けた。登場人物や、引歌など典拠ある表現には、本文に*印を付して簡略に付注した。引歌の引用と歌番号は『新編国歌大観』によった。訳文は原文を尊重しつつも、主語を補うなど注釈なしで通読できるように配慮した。

本物語は、『源氏物語』の外編と言うべきもので、光源氏が都を離れて須磨・明石に流浪していた頃の故常陸宮邸が舞台であり、主

人公の「姫君」は末摘花である。蓬生巻に記された光源氏の末摘花再訪の話をモチーフとして、荒れ果てた邸で零落に堪えながら健気に源氏の訪れを待つ末摘花の身辺に起こった怪異を描く。登場人物は姫君（末摘花）の外、侍女の侍従、大式、山の阿闍梨、大式の子の三河介、老女房ら。光源氏と惟光（大夫）も登場はするが……。

成章の奥書に「よもぎふの君にかたひきたる人の所為にや」とあるように、『源氏物語』に親しみ、末摘花の造型に関心を寄せる人物が『源氏物語』の別伝として創作したものであろう。この種の作品としては鎌倉時代の『山路の露』や室町時代の『雲隠六帖』などがあるが、本書はさほど古いものではなく、宣長作の『手枕』のごとく、江戸時代の国学者による手すさびである可能性もあろう。

なお、『表現技術研究』第八号（平成25年3月）掲載の拙稿「通釈『八重葎物語』（その四）」において、冒頭に二段落を脱していたことが判明したので、本稿の末尾に補遺として掲載することにした。不手際をお詫び申し上げる。

【1】ひっそりと暮らす姫君

年月つもりゆくまゝに、心ぼそうあはれなる御ありさまなり。お
いごたちなどは、「さるせかいにいきはなれ給とても、めならふ人
にまれ／＼の御おとづれはなからんやは。ついでにもとはせ給はぬ
が、いみじうつらき御心なりけり」と、よるづにいひあへり。さう
じみはたあながちに物つゝまじうし給御本上にて、うらめしげなる
御こと葉などもうちいでさせ給はねど、さすがに折々はたゞならず
あはれにうちなげかせたまふめり。侍従をぞ御かたらひ人にて、あ
けくれめしまつはさせ給。せめてこゝろぼそうおほしあまるをり
／＼は、むかしの事などいひあはせ給て、つゝまじげにうちひそみ
などし給ぞ、こよなき御よなれなりける。

*光源氏が都を離れて須磨・明石に流浪していることをさす。 *姫君
(末摘花)ご本人。 *末摘花の乳母子。「侍従などいひし御乳母子の
みこそ、年ごろあくがれはてぬ者にてさぶらひつれど」(蓬生巻)。

〔通釈〕

(源氏の君が都を離れて以来、)年月が経過していくにしたがつて、
姫君の暮らしは心細くお気の毒なありさまである。老女房などは、
「あんな遠いところに離れて行かれたにしても、昵懇な人にはたま
にはお便りがないものでしょうか。何かのついでにも音信なさらな
いというのは、たいそう冷たいお心です」と、あれやこれや批
判しあっている。姫君ご本人はと言えば、これまたひどく控えめな

ご性分で、恨みがましいお言葉を口になさることはないのだが、そ
れでもさすがに時々、はなはだお気の毒なさまでため息をついて
いらつしやるようだ。侍従をお話し相手として、朝に夕におそばか
らお放しにならない。どうしようもなく心細くてたまらない時には、
侍従と昔のことなどを語り合われて、遠慮がちに泣き顔になつたり
などなさるのは、姫君にとって侍従はこの上ない生きる伴侶なので
あった。

【2】姫君、琴の琴を弾く

秋にもなりぬ。此ごろふりつぎしなが雨、めづらしくをやみたる
に、風いとひやゝかに吹すさびて、よひ月のさしのぼるほど、一と
せの野分にたつみのらうなどもかたへはこぼれたふれたれば、のき
をあらそふ蓬むぐらのみぞ、物むつかしきさはりなりける。

姫君はしちかう出させ給て、月をながめさせたまふ。侍従めしい
で、御ものがたりなどし給つゝ、御きんめしよす。さるは、ひたみ
ちに心ふかくもてけちてすぐし給めれど、いふにもまさる御思ひに
て、ものゝみかなしうおぼさるゝまゝに、これをぞ御まぎらはしぐ
さにはせさせ給ける。

こだいのごくのものいたくしづめたるて、ひとつふたつひかせ給
御手つきぞ、さはいへど、いまめきたるわかうどのはやりかなるあ
だ／＼しさにはにさせ給はず、ふかうをかしげなりける。侍従も物
なげかしう思ひいでらるゝ折にて、をかしと聞あたり。

おまへちかき荻のけしきありて、いとたかうおとづれたるに、引さし給て、

いとどしくものおもふやどの荻のはに秋かぜたつときくがかなしき

かうやうの御うちとけ事も、侍従ひとりにはぢさせ給はざりける。侍従、

荻原やす多葉吹こすあきかぜにうたてつゆけきそでのうへかな

*「しげき蓬は軒をあらそひて生ひのぼる」(蓬生巻)。 **「こころにはしたゆく水のわきかへりいはで思ふぞいふにまされる」(古今六帖・二六四人)を引くか。 ***類歌「いとどしく物思ふやどの荻の葉に秋とつげつる風のおびしき」(後撰集・秋上・二二〇)。

〔通釈〕

そうこうしているうちに秋になった。このところ降り続いていた長雨が、珍しく止み間を見せた時、風がとても冷たく吹きつけて、宵の月が差し上ってくる頃、先年の台風で邸の西南の廊も一部が倒壊したままなので、軒と高さを競うように繁茂する蓬や葎ばかりが、何となくうっとおしい月見の障害物なのであった。

姫君は縁近くにお出になって、月をながめていらつしやる。侍従を召し出して雑談などをなさりながら、琴の琴をそばに持ってこさせる。というのも、姫君はひたすら思慮深く表面に出さないで過ごしていらつしやるようだが、実は言葉にする以上に激しいもの思い

があつて、何事も悲しくお思いになるにつけて、この琴をもの思いを紛らわせる種になさっているのであった。

古くから伝わる曲でひどく沈鬱な感じの調べを一つ二つお弾きになるご技倆は、そうは言つても、当世風の若者の軽佻浮薄な演奏には似ていらつしやららず、深みがあつて魅力的である。侍従も何となく嘆かわしく昔のことが思い出されている時分だったので、心惹かれて聞いていた。

御前近くにある荻が何かのはずみでとても大きな音を立てたので、姫君は琴を弾くのを途中でお止めになつて、歌をお詠みになつた。

いとどしく…(ますますひどくもの思いをする家の荻の葉に、秋風が立つと聞くことの悲しさよ。やっぱり私は飽き果てられてしまったのだわ。)

このようなうちとけ話も、侍従一人に対しては恥らいなさらないのであった。侍従の返歌。

荻原や…(荻原の葉末に吹き寄せる秋風のせいで、ひどく露っぽい私の袖の上ですこと。)

【3】空かき曇り、貴人来訪する

姫君いたくしづまり給て、御なみだのこぼるゝを、わりなくまぎらはさせ給て、又はかなげにかきならし給ほどに、にはかに雲さしおほひて、月もくらうなり、雨もふりいでぬべきに、いとさむくけ

おそろしければ、みかうしおろさせ給。

老人ども、「いで、れいならぬ御はしあかな。むくくしき夜なるに、風などもこそひかせたまへ。かうあれにたるところは、おになどいふものゝありて、めでたてまつるやうもぞある」といひあつかふ。げにいとなやましくし給てふさせ給に、御てなどもあつくなりにけめ。

人々御あたりさらずみて、御ゆなどまいらするほどに、さきのこゑしのびやかにて、こなたさまにくるものあり。「あはれ、大将*のきみの御けはひ思ひいでらるゝや。なぞの車にかあらん」などいふ。

*光源氏。葵巻の前年から右大将兼任。

〔通釈〕

姫君はひどく沈み込まれて、涙がこぼれるのを懸命に紛らわしな
さつて、またはかなげな様子で琴を演奏なさる。すると、一天にわ
かにかき曇り、月も暗くなつて、雨も今にも降り出しそうな気配で、
とても寒く、恐ろしい気がするので、御格子を下ろさせなさる。

老女房たちは、「まあ、いつもと違つた端居はじいですこと。気味の悪い
夜ですのに、風邪をお引きになるといけませんよ。こんな風に荒
れた所には鬼とかいうものがない、姫様のお姿に目を奪われるよう
なことがあるかもしれませんよ」と小言を言う。その通り、姫君は
とても気分が悪くて横になられたが、お手なども熱あつっぽくなつてい
たことだろう。侍女たちは姫君のおそばを離れずにいて、薬湯など

を差し上げる。

その時、先を追う声が忍びやかにして、こちらに向かつてくる者
があつた。人々は、「まあ、大将の君のご様子が思い出されるわ。
誰の車なのかしら」などと言う。

【4】来訪したのは源氏一行。惟光、侍従と対面

たゞこのみなみおもてにさしよせてこわづくるなれば、のぞきみ
るに、かりぎぬすがたの見しれるやうなるは、大夫*なりけり。おも
ほえずめづらしきにも、ふりぬる人はいとゞひとつなみだぞとゞめ
がたかりける。しはぶきがちにて、「あなうれし。すつまじかりけ
るいのちかな。あが君のかくておはしますを、このよにまちつけた
てまつらんとやはおもひつる。夢にやあらん。さりとも、しばしさ
めでをあれよ」などものぐるはしげにいひしろふを、侍従もきゝつ
けてこなたにいできたり。

御ぜんなどもありしながらなるを、「あやしう。さてもいつばか
りかみやこにはかへらせおはしました。かう人うときむぐらのか
どにのみとぢられてはべれば、さる御ひゞきもうけ給はりはべらぬ
に、かくておはしますを見たてまつるにも、猶うつゝとはおぼえ侍
らず」とてうちなく。

御車はすこししぞきて、よもぎの露みだりがはしきに立たり。大
夫ぞすのこにしりかけてかたらふ。「このをとつひにぞおほやけの
御ゆるしかうぶらせ給つる。ひるなどはなほつゝましようおぼしめし

たれば、かくよぶかうふりはへおはします也。らうがはしからぬお
ましどころまうけさせたまへ。姫君などか出させ給はぬ」といふに、
「げにむもれいたきもいかゞ」とて、入きてそゝのかしきこゆれど、
よひよりものゝけおこりたまふやうにてなやましきに、「さらに人
のけはひもむつかし」とて、うちもみじろき給はねば、とかくしあ
つかふほどに、大夫うちむつかりて、「かくとぶらひおはしましつ
るを、いかゞは。姫君の御けはひきかせ給はぬほどは、さらに御車
よりもさし出させ給まじくなん」といふに、老ごたちども、「いで、
にくの御心や。かう有がたき御心ざしをみるく、たゞにやはかへ
したてまつり給べき。終に身の御さいはひまち出給まじき御ひが
くしきかな」など、まがくしういひなげく。じぶうなどのいり
きていひあつかふをも「あなかま」とてきゝいれたまはねば、「も
のゝつきたてまつりて、ひたぶるごとをいはせたてまつるなめり」
とあきれたる心ちす。

* 惟光。光源氏の乳母子。夕顔・若紫巻で「大夫」と呼ばれる。須磨巻で
は民部大輔で「大輔」と呼ばれているので、ここでも「大輔」と表記する
のがよいか。

〔通釈〕

その車は、ちようどこの邸の南面みなおもてにさし寄せて案内を乞う声か
するので、覗いてみると、狩衣姿に見覚えがある人は大夫（惟光）
であった。思いもかけず珍しい来客の訪れに、年取った女房は皆ま

すます涙が止まらなかった。咳き込みながら、「まあうれしい。命
は捨てるものじゃありませんね。我が君がこうしておいでになるの
を、この世でお待ちできようとは思つたでしょうか。夢ではないか
しら。そうであつても、しばらく醒めないでおくれよ」などと、気
も動転して言いあうのを、侍従も聞きつけてこちらに出てきた。

前駆まへぐらの者などもかつてのままなのを見て、侍従は、「妙だわ。そ
れにしても、いったいいつ都にはお戻りになられたのでしょうか。こ
うして世間から離れた律の門の中に閉じこめられてばかりなので、
そういうご評判も承知しておりませんが、こうしていらつしやっ
たのを拝見しても、まだ現実のこととは思えません」と言つて泣く。

御車は建物から少し離れて、蓬の露がぐつしよりと置いている中
に立っている。大夫が縁の簀子に腰をかけて話をする。「この一昨
日に、朝廷おとよのお許しをいただかれました。昼間に散歩されるのはま
だ慎むべきだとお思いなので、こうして夜遅くにわざわざいらつし
やつたのです。見苦しくない御座所をしつらいなさってください。

姫君はどうして出ていらつしやらないのですか」と大夫が言うと、
侍従は「本当に、引つ込み思案すぎるのもどうか」と思い、姫君の
もとに入つてきて対面をお勧めするのだが、姫君は宵のうちから物
の怪けがが起りなさったよう気分が悪いのに、「その上、人の気配
に接するのもつらい」と言つて頑として動かれないので、侍従はあ
れこれと処置に困つていた。すると、大夫は機嫌を損ねて、「こう
してお訪ねになられたというのに、どうして出てこられないことが

あろうか。姫君のお声をお聞きにならないうちは、決して御車から出ていらつしやることはないでしょうぞ」と言うので、老女房たちは、「さても困ったお心ですこと。こうしてありがたいお志を目にしながら、そのままお帰し申し上げるなんてことがありませんか。結局、御身の幸せを待ち取りなさることのできないひねくれようです。すね」などと、いまいましがりに言い歎く。侍従などが入ってきて、説得するのをも、「うるさいわ」と言ってお聞き入れにならないので、「物の怪が取り憑いて、強情な言葉を言わせ申しているのだから」と、あきれた気持ちになる。

【5】明日の夜の再訪を約して源氏一行は帰る

とかくやすらふほどに、「夜明侍ぬべし。はしたなくなりてはびむなきわざなるを、あすのよさりこそまうで給はめ」とて、御車にもさやうにとり申せば、「いかゞはせん。めづらしき御心ざしをふすべがほならんも、やがてたえはて給ぬべきにや」とあやふくて、侍従なども思ひみだれたり。

雨そほふるに、御車のおとして出給ぬれば、おい人どもはものもおぼえず。とながらかへしたてまつるいとをしきをいひあはせつゝ、ひめぎみをあはめにくみて、なきぬべくはらだちさわぐ。

〔通釈〕

何かとぐずぐずしているうちに、大夫は、「もう夜があけてしま

います。人目につくようになっては不都合なので、明日の夜改めて参上なさることにしましょう」と言つて、お車にもそのようにお伝えするので、「どうしましょう。せつかくのお志に恨み顔を見せるのも、このまま愛想を尽かされてしまわれないかしら」と気が気なくて、侍従たちも思い乱れていた。

雨がしとしと降る中、お車の音がして出て行かれたので、老女房たちは呆然としていた。邸内にお入れしないままお帰したお気の毒さを互いに口にしながら、姫君を非難し憎んで、泣きそうなほど立腹して騒いでいる。

【6】源氏から手紙到来。返事は侍従が代作

夜も明ぬ。ひめ君なほいとくるしげにせさせ給て、御かゆなどをふれさせ給はず、おきもあがらせたまはぬに、御文あり。御つかひはみのむしのやうにてまうできたり。侍従ぞとりてみる。

「よべは置たるつゆもはらはんかたなくて、からかりきや。」

雨もよにくれどあはねばぬれつゝぞ我はきにける道のながてを

よむべはかへる、こよひはさは

などおほくて、こきみどりのかみのあやしくかうばしきにかいたまへり。

御かへりなどましてあるべうもあらぬ御さまなれば、侍従ぞきこゆる。

「よべはいかなる御たよりにか。

あけぐれのうはの空よりふる雨をかへる袖にはかこたざら
なむ

* ゆめうつゝとは

などくちとくて、おしつゝみてとらせつ。

* 「かきくらす心の闇にまどひにき夢うつとはこよひ定めよ」(伊勢物語
・第六十九段)を引く。

〔通釈〕

夜も明けた。姫君は依然苦しそうにしていらして、お粥などにも
口をおつけにならず、起き上がることもなさらない。そこにお手紙
が届いた。ご使者は養虫のような姿で参上してきた。侍従がその手
紙を受け取って見る。

「昨夜は身に置いた露も払うすべがなくて、つらかったこと
す。

雨もよに：(雨のひどく降る中を行つたのに逢つてくれないので、

濡れながら私は帰って来ました。長い道のりを。)

夕べは帰りました。しかし今夜はそうはいきません」

など多くの言葉が書かれていて、濃い緑の紙のひどく香をたきしめ
たものにお書きになつてあつた。

ご返事などはましてとても書きそうにない姫君のご様子なので、
侍従が代わつて返事をする。

「昨夜はいつたどういう御ついででお見えだったのでし
か。」

あけぐれの：(夜明け前の暗い時分に空から降ってくる雨に濡れ
たのを、心上の空のあなたは、私のもとから帰るつらさで濡れた袖
だと恨み言をおっしゃらないでください。)

昨夜のことが夢だったのか現実だったのかは今夜はつきりさせ
ましょう」

などとすばやく書いて、引き包んで使者に与えた。

〔7〕阿闍梨の君来訪、怪異に気づく

こよひばかりはなほ御たいめむあらんやうなどをいひあはするほ
どに、山のあざりのきみ、此ごろ院のなやましくせさせ給御いのり
にせうじおろさせたまふが、ふとまうでたまへり。

さしのぞきたまふよりうち見まはし給て、「このみやには、れい
ならぬびやうざなどやある」とはせたまふ。人々、ひめぎみのよ
べよりなやましうせさせ給よし申を、「さりや。よからぬものゝけ
はひするをみつつければ、まかりすぎがたくてまうでつる也。いか
なる御なやみにか」などとはせ給ほどに、御きてうのはづれにあり
つる御ふみのまかれたるを、めざとにみつつけ給て、「これまづよか
らぬものなり」ととらせ給をみれば、おほきやかなるはちす葉な
りけり。

侍従、かしらのけもたちて、「いかなるに(か)」とわなゝきいふ

を、「かゝるもの、いかにしてかけぢかうまゐりきつる」ととはせ給。姫君も、この君おはしましつるをきかせ給て、からうして御ぐしもたげさせたまふ。阿闍梨のきみちかくよりおはすに、侍従、よべのことわなゝかしいでたり。

君、「いで、そこたちのものはかなきに、あしきものゝところえてふるまふにこそあれ。かううちあれて人げすくなき所には、きつねなどいふげだものらも、人のたましひをおかしはかるわざする也。あしくてはとられもするなり」などすくよかにのたまへば、姫君は「むくつけくおそろし」とおぼす。

おい人どもはこなたによりきて、「あがほとけ、このなんとすけさせたまへ」と、手をおしすりつゝおぢあへり。「こよひはゐあかして経よみ侍らむ。人々ひめぎみの御あたりさらずものし給へ」などの給。

*蓬生巻に登場する末摘花の兄「禪師の君」であろう。稀に京に出た時は末摘花のもとに立ち寄っていたという。ただし、初音巻では「醍醐の阿闍梨の君」とあるので、山（比叡山）の僧ではなく、醍醐寺に住んでいたらしい。*朱雀院。漂標巻で冷泉帝に讓位。*底本「いかなるに」。私に「か」を補う。

〔通釈〕

今夜ばかりはやはりご対面なさるよう言い聞かせるるところに、山の阿闍梨の君が、このごろ院（朱雀院）がご病気でいらつし

やる御祈禱のために招き下るされなかつたので、急に参上なさつた。邸内をお覗きになった時から周りを見回しなかつて、「この宮に是不例の病人がいるのかね」とお尋ねになる。人々が、「姫君が昨夜から悩ましくしていらつしやる由を申し上げると、阿闍梨は、「そわか。よからぬものの気配がするのを見つけたもので、通り過ぎてくくて参上したのだ。いったいどういご病気なのだね」などとお尋ねになるところに、御几帳の端のあたりに、先ほどのお手紙が巻かれているのを目ざとく見つけて、「これがまずよくない物だ」と言つて手にお取りになつたのを見ると、それは大きな蓮の葉なのであつた。

侍従は、頭の毛も逆立つて、「どういふことなのですか」と震えながら言うのに、阿闍梨は、「こんな物が、どうやつて姫君のおそばにきたのだね」とお尋ねになる。姫君も、この君がいらつしやつたのをお聞きになつて、やつとのことで上体をお起こしになつた。阿闍梨の君が姫君の近くにお寄りになると、侍従は、昨夜の出来事を震え震え説明した。

阿闍梨の君は、「まあ、お前さんたちが頼りないので、悪しき物が場所を得て跳梁跋扈するのだよ。このように荒れ果てて人目の少ないところには、狐などという獣^{けだもの}らも人の魂を犯し謀^{はか}るようなことをするのだ。悪くすると魂を取られてしまつたりもするのだぞ」などときつぱりとおつしやるので、姫君は、「気味が悪く、恐ろしい」とお思いになる。

老女房たちはこちらに集まつてきて、「我が仏、この危難をお助けくださいませ。」と、手をすりながら怖がつている。阿闍梨の氣君は、「今夜はここで夜明かしをして經を読みませう。お前さんは姫君のおそばを離れずについていらつしやい」などとおつしやる。

【8】阿闍梨の君の読經により、その夜は無事

日くれゆくまゝに雨もうちしきるに、あざりのきみ、夜居のそうになりたまひて、こゑはいとたふとくて仁王經よみ給。人々は此きみひとりをつかき山とたのみて、みきてうのあたりにかしらをつどへつゝわなゝきゐたり。

よなかうちすぐるほどに、風さへあらくしう吹出ぬれば、「へんぐゑのものこよひこんといひつるを」と、あるかぎりいけるこゝ地もせず。たゞこのまくらがみにものゝおとひしくときこえて、こゝかしこのさうじなどもゆるがしあくるやうにおぼゆ。

されど、かくて御まもりつよくおはしますけにや、ことなる事もなくて夜もあけゆくにすこしなぐさめて、姫君もおきゐたまへり。「此きみおはしますはずは、ほとく鬼ひとくちにくはるべかりけり」とおもふに、猶おそろしきことかぎりなし。

つとめて、あざりの君、みかうしまゐらせて御覽するに、わびしげにあげられたる庭のうちに、池などもむかしのかたちもなく、かやはらなどたかうおひたるうへに、いとけうとげにみやらるゝ木だち

あるを御らんじて、「この松の木の子年ふりてこけむせるにぞ、きつねはよりぬべき。これきらせ給はゞなむあらじ」との給。

「このごろ、やまどのかみなる人のよしめきたるせざいうゑさするが、『この木をはなせ給てんや』とたびくとり申を、さらにうけひ(き)給はざるを、さらばかゝるついでに、さもやはなちきこえまし」など申を、「いとあるまじき事也。としごろさるものゝらうじてすみかとしたるものは、人の家にうつきせつとも、又よからぬわざすべし。たゞきりたふして川などにながさせたまへ」との給。

こ宮のもちつたへさせ給て、この姫君の一の御てうどしおかせたまへる御かゞみの、ふるくてあるをとり出させ給て、「これ、姫君の御あたりにおかせ給て、なさせ給そ。おのれいましばし侍ぬべきを、おはやけの御すほうにいそぎまあれば、えとゞまり侍らず。されど、いまはあしきものもえよりき侍らじ」などの給て出させたまふを、姫君は心ぼそうおぼしたり。

この君にいのちをかけきこえたる老びとどもは、なきのゝしりて、かへらせ給はんことをあかずをしみきこゆれど、あるべき心おきてなどこまやかにいひをしへ給て出させ給れば、大貳のいへの人よびとりて、このまつをきりたふしてかも河にはらへすつべきやうなどいひつくれば、きりにきりて、をひもていぬ。

人々、むげにくして、いづちもくあくがれぬべくおもひゐたるに、かゝる事さへそひたれば、いとゞやすき心ちもなく、うたてお

ぼえて、「なほすこしけちかきところらうつろはせたまへ」などきこゆれど、れいのどうなくておはず。

* 「船に乗りては、楫取りの申すことをこそ高き山と頼め」(竹取物語)。

** 「鬼はや一口に食ひてけり」(伊勢物語・第六段)。*** 蓬生巻

に「受領」とある人物か。「この受領どもの、おもしろき家造り好むが、この宮の木立を心につけて、放ちたまはせてむやと、ほとりにつけて案内申さするを」。*** 底本「うけひ給」とあるが「うけひき給」の脱落と見て「き」を補う。*** 蓬生巻では、未摘花の母方の叔母の夫。

〔通釈〕

日が暮れていくにつれて雨も激しくなる中、阿闍梨の君は夜居の僧におなりになって、とても尊い声で仁王経をお読みになる。人々は、この君ひとり高い山のように頼りにし、御几帳の周辺に頭を集めて震えていた。

真夜中が過ぎる頃に、風までが荒々しく吹き始めたので、「変化の物が今夜来ると言ったのに」と、誰も彼も生きた心地もしない。ただ、姫君の枕元に怪しい物の音がみしみしと聞こえて、あちらこちらの襖障子なども揺さぶって開けるような気がする。

しかしながら、こうして阿闍梨の君の護りが強くていらつしやつたせいか、別段のことはなくて夜も明けていくのに少し心を慰めて、姫君も起きてお座りになった。「この阿闍梨の君がいらつしやらなかつたら、ほとんど鬼に一口に食われてしまうところだった」と思

うと、今も恐ろしいこと限りがない。

翌朝、阿闍梨の君が御格子を上げさせてご覧になると、わびしげに荒れた庭の中に、池なども昔の形もなく、茅原などのように雑草が高々と生い茂っている上に、ひどく疎ましげに見やられる木立があるのをご覧になって、「この松の木、古めかしく年を経て苔むしているのに、狐は身を寄せるはずじゃ。これを切らせなかつたら難はあるまい」とおっしゃる。

「このごろ、大和守である人が風流めいた前栽を植えさせているのですが、『この木を手放しなさいませんか』とたびたび申し入れてきますのを、姫君は全然承知なさらないようです。それではこれを機会にその人に手放してさしあげましょうか」などと申すのを、「まったくんでもないことよ。長年そのような怪しい物が占領して栖として居るものは、他人の家に移植させたとしても、またよからぬわざをするものじゃ。」ただ切り倒して川などに流させなさい」とおっしゃる。

故宮が所持しお伝えなさって、この姫君の第一の調度にしておきなされた鏡の、古びているのを取り出させになって、「これを姫君のおそばに置かせなかって、離しなさらぬように。拙僧はもうしばらくここにいたいところですが、朝廷の御修法に急いで参上するところなので、とどまることができません。されど、今は悪しき物も近寄ってくることはできませんまい」などとおっしゃって出て行かれるのを、姫君は心細くお思いである。

この君に命をかけてお頼りしている老女房たちは、泣き騒いで、お帰りになることを残念に思い惜しみ申し上げるのだが、阿闍梨の君はしかるべき心構えなどを細々と言い教えて出て行かれたので、大弐の家の人を呼び出して、この松を切り倒して賀茂川に祓えをして捨てるべき方法を言いつけたところ、たちまちに切つて、背負つて持ち帰つた。

邸内の人々は、ひどく気がめいつて、どこへでもさまよい出ようかと思つていたのに、このようなことまでが加わつたので、ますます安らかな気持ちにもなれず、辟易して、姫君に「やはり少し世間に近いところへお移りなさいませ」などと申し上げるのだが、例のごとく心を動かす気配はなくていらつしやる。

【9】源氏、赦免されて帰京。人々、来訪を期待する

されど、げにまたあやしきこともなくて、その八月にぞ、源氏のきみ世にゆるされて、みやこにかへらせ給。「いかなるべきよにか、かゝる事をまちつけたてまつらん」と、月のひかりのつちのなにかくれたらんやうにて、たかきもいやしきも、ほどにつけつゝなげきあへるを、かうてふたゝびたちかへらせたまへば、かぎりなきよのよるこびにいひさわぐを、おのづからもりきゝて、「さりとも、あはれなりし御心ざしのなごりなからんやは」と人々もたのみきこえ・みづからも人しれずしたまちおはしますに、ほどふれど露ばかりの御おとづれもなし。

れいの御ものはちには、「こひしや、つらしや」などうち出て人にはかたらひ給はねど、「げに、たのみがたきは人のこゝろなりけり」と、さすがにやうくおぼししらるゝに、「道もなきまで」など、心ひとつにうちながめさせ給べし。とほき所におはしましけるほどこそ、ことわるかたにもなぐさめつれ、年ごろのつもりもとりかへし、たへがたう物わびしきに、「さは、いまはかぎりなめり」など、れいの心みじかき老人どものうちひそめくをきかせ給て、「げに」とおぼすに、いみじうこゝろぼそし。

*光源氏の明石からの帰京は、二十八歳の年の八月。 * * * 底本「きこえ」とあるが、「と」は衍字と見て削除する。 * * * 「わがやどは道もなきまであれにけりつれなき人をまつとせしまに」（古今集・恋五・七七〇・遍昭）を引く。

〔通釈〕

しかしながら、阿闍梨の言つた通り再び怪しいこともなくて、その年の八月に、源氏の君が帝に赦免されて、都にお帰りになった。「いったいいつの世になつたらこのようなこと（源氏の帰京）を待ち迎え申すことがあるるか」と、月の光が地中に隠れてしまつたかのように、高貴な人も賤しい人も、身分に応じて嘆きあつていたが、こうして再び都にお帰りになつたので、この上ない世の慶事と言ひ騒ぐのを、自然と漏れ聞いて、「そうは言つても、うるわしかつた御愛情の名残がないはずはなかるう」と周りの人々もお頼り申し、

姫君自身も人知れず心の中で源氏の君の訪れを待っていらつしやつたが、月日が経つても露ほどの音信もない。

例の通り恥ずかしがり屋の姫君は、「恋しいなあ、つらいなあ」などと口に出して人には語りなさらなければども、「本当に、頼りにならないものは人の心であつた」と、さすがに次第に思い知られるようになって、「道もなきまで」などと、心中ひそかにもの思いに沈んでいらつしやるはずだ。源氏の君が遠いところをいらつしやつた間は、音信がないのも無理はないと思つて心を慰めていたが、帰京後の無沙汰に直面して、長年の間の積もり積もつた思いも立ち戻つて、堪えがたくものわびしくて、「それでは、今はもうお見限りのようです」などと、いつもの気短な老人たちがひそひそ話をするのをお聞きになつて、姫君も「本当にそうだ」とお思いになるので、はなはだ心細いのであつた。

【10】侍従、門前を過ぎる源氏一行に手紙を届けて来訪を促す

十月十日ばかり、しぐれうちして、こがらしになりゆく風のけしき、山里のこゝちして、ものさびしうあはれなり。いとゞなに事にかはまぎれ給はむ、日ひとつつくぐといといたくながめくらし給。

さるほどに、大式のをひに、みかはのすけなるもの、この侍従にかたらひつきて時々こゝにきかよふが、くらうなるほどに入きていふやう、「たゞ今こそ権大納言殿は、このみかどすぎさせたまへ。」

さもふりがたき御やつれありきかな」ゝどいふに、「さは、まことに忘はてさせ給けり」と思ふにも、猶このみわの山ぞかなしかりける。

「されど、ひたぶるにうちすてさせ給とはなくて、おのづからまぎれありかせ給やうもやあらん。中々おしこめてつれなしづくらんよりは、これよりおどろかさせ給はゞ、めづらしきに、さてなびきもし給はむかし」など、よろづに思めぐらして、姫君をそゝのかしきこゆれど、さらにおほしもかけ給はず。

「わが身はかうかずならぬものにて、人の御わすれ草をまかせきこえむこそめやすからめ。あいなう、さしすぎたりとおぼされんがわりなき事」とのたまはせて、いよく御かほひきいれつゝおはしませば、「とほく行過ぎせ給はぬほどに」と、いそぎて、

さしぐれふりにし里をいとふとや空ゆく月のかげもとゞめぬと、すけしていひかく。

御車はやゝ行すぎぬるに、をひつきて、「大夫のきみやさぶらはせ給。こゝにとり申べき事なん」とて、けしきをとりてつたへきこゆれば、「げに、昔わけさせたまひしあさぢが原ぞかし。あはれ、いかにあれまさりつらん」とて、御車にごらんぜさす。

「げに、としもへぬるを、今はひちがさのたよりにかこちやらんもいかにぞや。うひくしくさすがる心ちするを、かれよりすゝみきつるも、たゞならずをかしうもあるかな」ゝどの給はせて、御車引入させたまふ。

やゝふかういる所なれば、御ぜむの人々さしぬきのすそ引あげつゝ草の露をわけわづらふ。月くらければ、松おほくまゐりて、みなみのわたどのにさしよす。

侍従、「さりや」と、かつくうれしきものから、人わろくつめくはるれど、けざやぎてわらふださしいづべきに、はたあらねば、おまし所など引つくるひていれたてまつる。おほとなぶらまゐりたれど、「なれるすがたもはづかし」とて、屏風のはざまによりおはさうず。

*蓬生巻に、「侍従も、かの大貳の甥だつ人語らひつきて」とある。大貳の甥が三河介であることは『源氏物語』に見えない。 **光源氏は明石から帰京するとすぐ「数より外の権大納言」になった。 **「わがいはみわの山もとこひしくはとぶらひきませすぎたてるかど」（古今集・雑下・九八二）を念頭に置く。 ***「なまわろく爪くはるれど」（帚木巻）。 ***「君が門今ぞ過ぎゆく出でて見よ恋する人のなれる姿を」（住吉物語広本、源氏釈・奥入引歌）を引く。

〔通釈〕

十月十日あまりの頃、時雨がして、木枯らしになっていく風の様子、山里にいるような気がして、ものさびしくしみじみとした気持ちになる。そうなるとますます、何ごとにもお心が紛れようはななく、一日じゅう、姫君はただつくづくとももの思いにふけりながらお暮らしてである。

そんな時、大貳の甥で、三河介の職にある者が、この侍従に求婚して、時々この邸に通ってきていたが、暗くなる時分に入ってきて言うには、「ただ今、権大納言殿が、この家の門前を通り過ぎていらつしやいます。それはもう昔と変わらないお忍び歩きですなあ」などと言うので、侍従は、「それでは、本当に姫様のことは忘れ果ててしまわれたのだ」と思うにつけても、やはりこの「三輪の山」は悲しいのであった。

「そうは言っても、ひたすらうち捨てておしまいになるといふわけではなくて、忍び歩きをなさっている間に偶然こちらにも紛れ寄られることもあるかも知れない。なまじつか引きこもらせて平静を装っているよりは、こちらから気づかせてさしあげたなら、珍しくて、そのまま心を寄せていただけるともあろうよ」などとさまざま思い巡らして、姫君にお勧めしてみるのだが、そんなことは思いもかけなさらない。

「我が身はこうして取るに足りない者なので、人に忘れ草の種を播かせてさしあげるのがお似合いです。本意にも、出過ぎた振る舞いとお思いになられるのはたまりません」とおっしゃって、ますます夜具にお顔を引き入れていらつしやるので、侍従は、「遠く行き過ぎてしまわれないうちに」と急いで、

さよしぐれ：（小夜時雨が降る、古くなった里を厭うというので、空を行く月が影も留めないで通り過ぎて行かれるのですか。）

と三河介を使って言いかけた。

お車は少し通り過ぎていたが、介は追いついて、「大夫の君はいらっしゃいますか。ここに申し上げるべきことがあります」と言つて、様子をうかがつてお伝え申し上げたところ、大夫は、「なるほど、昔分け入られた浅茅が原であるな。ああ、どんなにか荒れまざつていふことであるう」と言つて、お車の主にご覧に入れた。

「本当に、年も経てしまったのに、今は肘笠雨（にわか雨）の便りにかこつけて立ち寄るのもいかなものか。もの馴れないふうでさすがに気恥ずかしい気がするが、あちらから進んで声をかけてきたのも尋常ではなく面白いことよ」などとおっしゃつて、お車を邸にお入れなさる。

門から少々深く入り込んだ所なので、御前まへ駆かの人々は指貫さしぬきの裾すそを引き上げながら、草の露を分けあぐねている。月は暗いので、松明を多くともして、南の渡殿わたどのにお車をさし寄せる。

侍従は、「いらしてくださいさつたか」と一方では嬉しいものの、何となくきまり悪く照れくさい気持ちだったが、しっかりとした態度で座布団を差し出すべきなのに、それがないので、姫君のご寢所を引きつろつてお入れ申し上げる。大殿油おおとなかぶらをともしたけれど、姫君は「なれる姿も恥ずかしい」と言うので、屏風の隙間に身を寄せようとなさる。

【11】源氏一行、犬に吠えられて散り散りに逃げる

さる折しもよ、姫君、御むねいたくおこりてなやませたまへば、

「いかさまにせん」とあきれたり。れいはさやうにおどろくしき御なやみなどもことになきを、いみじうくるしげにせさせ給へば、人々、御おさへやなにやとまどひさわぐ。あまりほどあらんもかたじけなければ、侍従みざり出て、いさゝかうちふるまふ物は、おほとなぶらふときえにけり。

かゝるほどに、この老ごたちの中にさとよりきかよわらはのひるつかたみてきたりける犬のしも屋のもとにふしたるが、火のひかりを見つけておどろくしうとがむるに、御ぜんの人々おぢまどひてにげちり、みす引かづきなどす。夜ごゑものさわがしきに、すけいみじうせいすれど、なほ「らうく」といとたかうほえかゝりて、此わたどのによりくれば、「あなや」といふまゝに、御車やりちらしてみなにげうせぬ。

げんじのきみの事も今すこしかきつがまほしけれど、らんぎく* **のくさむらのむげにあさくなりなむがいとをしく。

* 「あなや」といひけれど、神鳴るさわぎに、え聞かざりけり」（伊勢物語・第六段）。
* * 「鼻鳴二松桂枝一、狐蔵二蘭菊叢二」（白居易「凶宅詩」）
により、「蘭菊の叢」は狐の住みかをいう。

〔通釈〕

ちやうどその時、姫君は胸の発作がひどく起こつて苦しみなさるので、周囲の人々は「どうしたらよいのか」と茫然とした。いつもはそのように大げさなお苦しみなども特にないに、ひどく苦しそ

うになさるものだから、人々は胸を押さえたり何かと慌てふためく。あまり時間がかかるのも畏れ多いので、侍従がいざり出てきて、少しばかりお相手をしていると、大殿油が急に消えてしまった。

そんな時に、この邸の老女房の中に里から通つて来ている少年が昼間に連れてきていた犬が、下屋しもやのそばで横になっていたが、火の光を見つけて激しく吠えかかったので、姫君の御前の人々は怖がってばらばらと逃げ、あるいは御簾をひきかぶりなどする。夜の鳴き声は騒がしいので、三河介は強く制止したけれど、犬はなおもワンワンととても大きな声で吠えかかり、この渡殿に寄つてきたので、ご一行は、「あなや」と叫んだとたん、お車を壊し散らして皆逃げ失せてしまった。

源氏の君のことももう少し書き継ぎたいけれども、蘭菊くきくわの叢むらがひどく浅くなつてしまひそうなことがお気の毒で……。

【12】奥書

此一帖、古人もことに沙汰しおかれぬものにて、作者・題号などもなくて侍しを、伝見侍し也。本はふるめかしき手しからの紙にかゝれたるが、いみじうしみさして侍しかば、異本なども有がたまゝに、所々意見をも加へて、「よもぎむぐら」といふ文字のあるに依て、『八重葎』と名づけ侍也。又、「院の御なやみ」「権大納言」など、かける事不審すくならぬは、只本のまゝなり。よもぎふの君にかたひきたる人の所為にや。今猶考求侍べし。

宝暦九年二月中浣

成章

寛政七年

中夏写之

成学

〔通釈〕

この一帖は、古人も特に取り扱つてこられなかつたものであつて、作者も題名などもわからなかつたのを伝え見たのです。その本は古めかしい筆跡で唐の紙に書かれたものでしたが、ひどく紙魚が食つていましたので、校合すべき異本もありそうになかつたため、所々に私見も加えて、「よもぎむぐら」(第二段)という文字があるのによつて『八重葎』と名付けましたのです。また、「院の御病氣」とか「権大納言」など、書いてあることに不審点が少なくないのは、ただそのままに写しました。蓬生の君(末摘花)をひいきする人のしたことでしようか。今なお考える必要があります。

宝暦九年(一七五九)二月中旬

成章

寛政七年(一七九五)五月にこれを書写した。

成学

〔付記〕貴重なご所蔵本の複写をご提供いただき、底本に使用することを許可くださった神野藤昭夫氏に、記して厚く御礼申し上げます。

通釈『八重葎物語』（補遺）

【53】祈禱を受けるため、船を難波に戻す

大貳もよりきて、「此御有さまにてはいかゞはせん。御いのりこそ、此かたにてたのもしき物なれど、この浦にてさるべきげむぎもあらじ。まだ京も近ければ、よびにつかはしてん。そのくるらんをまたむもおぼつかなし。いかにせん」などいひさわぐ。「この風には、こぎ帰さむはいとよかなり。あらかしほども侍らず。たゞなにはへ帰り給ひてよろしからん」とかちとりきこゆれば、「さしてむ」とてこぎいづるに、あやにくなる事もなく、やがてもとの江にかへりぬ。

〔通釈〕

大貳も近寄つて来て、「こんなありさまではしかたがない。お祈りこそが病の際には頼りになるものだが、この海辺にしかるべき験者げんざもいるまい。まだ京も近いので、呼びに人を遣わそう。しかし、それが到着するのを待つ間も心配だ。どうしようか」などと言ひ騒ぐ。「この風では、漕ぎ返すのが一番でしょう。たいして荒い風ではありません。まっすぐ難波へお帰りになるのがよろしいでしょう」と楫取りが言うので、「それならば、そうしよう」ということになり、漕ぎ出したところ、不都合なこともなく、たちまちもとの難波江に戻った。

【54】女君、加持・祈禱を受けるも、効果なし

やどり取いで、其わたりさるべき御いのりの僧、こゝかしこよりもとめ出て、かぢ参らせさわぐ。物けなどにてとみにとりいれたる御心ちにもあらず、物きこしめさで日比によく成給へば、何かひなし。おば君つとそひおはして、「いみじき事かな。めをだに見あげ給へ。ふねこゝちとの給ひしかば、よのつねにこそ思ひたゆみしに、いかでおのれをすて、行かんとはおもひなり給ふぞ。京にとゞめ奉らず成にしも、大かたにやおぼす」など、たゞなきになきて聞え給へど、いらへもえしたまはず。

〔通釈〕

宿を手配して、その近辺のしかるべき祈禱僧をあちこちから探し出して、加持を施させて騒ぐ。しかし、物の怪けなどが原因で急に取れ憑かれたようなご病気ではなく、食事の口になさらないで長い日数が経過して衰弱なされたのだから、物の怪退散の加持を受けたところで何の効果もない。叔母君はずっと付き添っていらして、「困ったことだわ。せめて目だけでもお開けください。船酔いとおつしやったから、ありふれたことと思つて油断していましたのに、どうして私を捨てて逝いこうなんて思うようになったのですか。京にお留とどめしなかつたことも、いい加減な扱いだと思ひなのですか」などと、ただ大泣きに泣きながら申されるが、女君は返事もおできならない。